

Title	田村秀夫著 イギリス革命思想史：ピューリタン革命期の社会思想
Sub Title	
Author	寺尾, 誠
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1962
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.55, No.3 (1962. 3) ,p.317(109)- 319(111)
JaLC DOI	10.14991/001.19620301-0109
Abstract	
Notes	社会思想史研究特集 新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19620301-0109

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新渡戸のような寛容と思想の柔軟さ、自由さと、忍耐が必要なのだとも考えさせられる」とされている。

筆者は右の諸論文につき、又各論文の相互関連につき論すべき点を多くもっているが、ここはその場所ではないから別の機会を待ちたい。見られる様に、思想史研究の上に実に豊かな問題提起をしているので、あえて紹介の筆をとった次第である。(創文社刊・A5・三三二頁・六五〇円) —中村 勝己—

丸山眞男著 『日本の思想』

この書物については、すでに多くの新聞、雑誌においてとりあげられている。それ故、内容の紹介は、いままら必要ないであろう。ここではむしろ、丸山教授により提出された問題の基本点と、それが今日の日本の産業経営社会につながる問題点をのべ、最後にこの書に収められた理論のうち、われわれに身近かな問題性をもつものを指摘しておく。

(1) 問題の基本線。いろいろな思想の雑居性——これが日本の思想の特徴である。この

把握が教授の問題の出発点である。われわれの考え方を分解してみると、「仏教的なもの、儒教的なもの、シャーマニズム的なもの、西

欧的なもの——要するに私たちの歴史にその足跡を印したあらゆる思想の断片に行き当る。」つまり、千年以前の昔から現代までの世界の思想的産物が日本の思想史のなかにストックされている事実、しかもそれらの各思想を全体として位置づけるような、そういう意味での原理的な思想が形成されなかつた伝統。このような日本の思想的伝統に対する認識と反省から、日本の思想的構造を出来るかぎり明晰に分析し、それを通じて、われわれの精神的成長を育くんだ思想的伝統から脱出すべき足場と契機をさぐり出そうとした、思索的苦闘の成果が本書なのである。

その意味で、ここには、丸山教授自身の内的思想の歩みとその際ぎざまれた問題点が、日本思想の史的構造の考察、分析と見事に融合しているのである。したがって、われわれは第一にこの書中に投影された教授自身の思想的運動の軌跡を追うと共に、そのさし示す方向をさぐらねばならない。第二に、ここに理論化された日本思想の構造的関連のなから、自分たち自身の問題をくみとり、そ

れぞれの思想的軌道の確立が要求されるのである。

そのような角度から、つぎに二つの問題をあげようと思う。

(2) 「タコ壺文化」と「サラ文化」の問題。丸山教授は、社会の基底に伝統的な共通のカルチャーのある社会を「サラ文化」とよび、最初から専門的に分化した知識集団イデオロギー集団が閉鎖的なタコ壺をなし、それぞれの内部でのみ仲間言葉をしゃべり、そこに共通の広場が形成されない社会を「タコ壺文化」として比喩的に表現し、日本の社会をタコ壺文化としてあざやかに規定された。さてわが国においては、タコ壺集団形成は知識集団、イデオロギー集団にのみ行われているのではない。日本の企業もまたタコ壺経営組織をもち、それに対応して労働組合もまたタコ壺組織をもっている。労使双方とも組織の近代化にあたり、厚いタコ壺の壁にぶつかっていることは、あまりに周知であろう。終身雇制、年功序列体系、閉鎖的労働市場そして企業別組合である。総評や全労の呼号にもかかわらず、日本の労働者は企業内に閉じこもって、労働者階級として企業を越えた横の組織に広がるべき、共通の社会的基盤

も、共通の考え方も、もち得ないのである。日本の社会主義政党的弱さはこの点にある。一方、日本の経営者たちは、自己経営内部の従業員を、学歴別、性別、世代別、地域別などのこまかいタコ壺群の中に押しこめ、さらに他の経営体に対しては、自身が一つの大きなタコ壺組織体をなして、生産性の原動力としての機能的原理の発動にブレーキをかけ、自ら悩んでいるのである。

(3) 「する」価値と「である」価値。右にのべた機能的原理こそ業績本位を本体とする近代的原理であり、制度を身分化し固定化し、その存続維持を第一とする前近代的原理と明白な対極を形成する。この相対立する原理を教授は、「する」価値または「する」論理と、「である」価値または「である」論理として対置させた。機能的原理としての「する」価値が、資本主義的近代経済社会に典型的に打ち出されたことは、説明の必要ないことである。そして丸山教授が「する」価値の近代日本の先駆的表象として福沢先生をあげる時、まさにその点にこそ、近代日本資本主義の形成と慶応義塾との深いつながりが結ばれたのである。慶応義塾の日本近代史上における大きな位置は、右の「する」価値の主要な拠点

新刊紹介

たるところにあつたのである。今日、われわれはこの伝統、つまり、「する」価値原理をよく保持させているであろうか。権利の上に眠る者に法的保護が与えられないと同じように、伝統の上にあぐらをかく者にはよく伝統を生かすことは出来ないであろう。伝統を革新することに、かえって伝統に永続性ある生命力を吹きこむことこそ、われわれの課題であるが、その革新的主体は、われわれ自身により、自身のうちにうみ出されねばならない。丸山教授の「日本の思想」は少くとも、このことを教えると共に、そのための自己省察に強力な手がかりを与えないではおかないのである。(岩波新書・一九二頁・一〇〇円)

—石坂 巖—

田村秀夫著

『イギリス革命思想史』

—ビュリタン革命期の

社会思想—

本書の著者の問題意識は第一に一六四〇年から六〇年に到る英国の市民革命の把握の仕方にある。すなわち著者は一方で英国において伝統的であつたビュリタン革命という

らえ方に対しては、クリストファー・ヒル以来の市民革命としてのとらえ方の積極性を承認するのである。しかし同時に著者は、後者の市民革命的とらえ方を一面的に主張することは英国革命が宗教的観念や利害の対立を強く表わしていたことを無視もしくは軽視する危険があると考えるのである。従って英国革命をイギリスの市民革命とビュリタン革命という二重の側面でもらえることが、革命の全体像の正しい把握になるといふわけである。

さて著者の問題意識の第二は以上のような英国革命の把握の上で当時の社会変革活動とその行動を支えた思想を生き生きとした対応関係の中で描きだそうということにある。しかもこの場合著者が注目するのは、市民革命の課題である資本主義的生産力の推進に積極的に役割を果たした人々の思想と行動よりも、むしろ革命の基本線から脱落しながらも、革命的エネルギーの供給源となつた手工業者や農民の民衆グループの思想と行動なのである。何故ならこれらの諸思想は資本主義の発展に対決する近代社会思想の諸類型の原型を示しているし、またこれらの思想と行動の分析によって始めて英国革命の全体像も十分な

形で構成されることになるかと考へるからである。

さてこのような問題意識に立つてまず序説では市民革命としての英国革命の特質が、反独占運動と農業・土地問題の二点について極く簡単にふれられる。そして以下、第一章左翼民主主義の成立——ジョン・リルバーンとレヴェラー運動——、第二章社会主義ユートピアの構想——ジェラード・ウィンスタントとデイガー運動——、第三章革命的無政府主義の先駆——第五王国思想の発展——、第四章不服従運動とその思想——初期クエーカーの社会思想——の順で社会変革行動に参加したグループの行動と思想が克明に分析されている。とくに革命の政治過程の推移と共に諸勢力の行動がどのように変化していったのか、またそのような行動を支えた思想はどのような特徴をもっていたのかという点についての分析はすぐれているといえよう。しかしこのような独特の社会思想史的分析には今後解決すべき問題がないわけではない。

その第一は市民革命としての英国革命をどのように把握するのかわくという問題である。それはとくに英国革命の経済過程の分析(経済史的分析)の前進にまつところが大きい。

同時に経済史の成果に基づく政治革命としての英国革命の特殊性を明らかにすることを意味する。これは著者だけに求めることは無理なのであるが、この種の社会思想史的分析の前進にとって絶対に欠くことのできぬ必要条件であろう。例えば英国革命が宗教的な性格を帯びていたこと、或は政治革命として保守的な性格をまもっていたこと等の英国革命の個性的性格がそれによって明らかとなるであろう。そしてこの必要條件の可能な限りの充足の上で、諸勢力の行動及び思想の政治的・社会的な意味を確定すべきである。

ここに第二の課題がある。すなわち著者がレヴェラーズ、デイガーズ、第五王国、クエーカーの諸勢力の行動及び思想を統一的に夫々左翼民主主義、社会主義ユートピア、革命的(暴力的)無政府主義の先駆、非暴力的無政府主義等と把握するのである。しかしこのような規定を十分説得的なものとするには、第一の課題の充足と共に、経済、政治過程の変革をも包含した社会全体の変革のダイナミズムをどのようにつかみとるかという方法的な問題、さらには近代資本制社会成立後に発展した諸思想と英国革命当時の思想の比較についての方法的問題等の解明が不可欠である。

る。例えば英国革命前期におけるレヴェラーズとデイガーズの運動及びその思想と後期の第五王国運動とクエーカーの運動とその思想が何か平板的に並列されてしまつて、両者が革命の夫々の過程でうまれざるをえなかつた必然性、とくに前期の社会的・政治的な二つの潮流の運動が何故後期に到り、極めて宗教的な性格をもつた二つの潮流に再編されたのかという点が、つかみえないことになるのである。つまり前期と後期では民衆の運動の展開形態、またそれを支える思想にかなり大きな相違のあることにもっと注目する必要があるのではないかと云うことである。そしてこのような研究は、例えばドイツにおける宗教改革と農民戦争の時期と同様の問題の解明に大きな示唆を与えるであろう。特に農民戦争終了前と終了後の民衆運動の展開形態とこれを支える思想には大きな相違があり、終了後のそれは極めて宗教的性格を強くしていたこととの解明には大きな示唆が与えられると思ふ。そしてここで生まれた再洗礼派の運動と英国でうまれたクエーカー教徒の間にも共通性のあることは興味深い事実である。

以上のような問題点を有するにせよ、英国革命当時の社会思想の統一的研究を一步前進

せしめたことは疑いない。(創文社・A5・二七五頁・八〇〇円) —寺尾 誠—

E・フロム著

『マルクスの人間概念』

(原名 Erich Fromm: *Marx's Concept of Man*, Friedrich Unger Publishing Co., 1961, \$4.75)

本書を読むに先立って念頭にすべきことは、「思想史名著叢書」(Milestones of Thought in the History of Ideas)という、やや啓蒙的性格のシリーズの一冊として書かれたものであること。それも、「経済学II哲学ノート」を主体とするマルクスの諸著の抜萃の解説的序文として書かれていること。マルクス主義にたいする現代アメリカの甚だしい偏見を、初期マルクスのヒューマニスティックな性格に力点を置く解釈によって矯正し、いずれの冷戦哲学にも捕われない地点で、マルクス思想の遺産を「健全な社会」建設の青写真に撰取することを旨とする本であること、である。その際、「経済学II哲学ノート」の本格的翻訳を含むのは、この本を嚆矢とするという風土

でなされた仕事であることも考慮されねばならない。(本書の「ノート」の訳者は、ロンドン大学の T. B. Bottomore である。これ以前に、評者の知るかぎりでも、モスクワ版英訳が Martin Milligan によってなされており、R. Dunayevskaya: *Marrism & Freedom*, Bookman Association, 1958, には要部の抄訳が収められている。しかし、モスクワ版は、アメリカでは入手できない事情があったらしい。また、Dunayevskaya の紹介は甚だしい反共主義に害われていた。従つて、「ノート」の本格的紹介はフロムの言うとおり、アメリカではこの本が最初といえるのである。)「ノート」や「初期マルクス」の研究が活況を呈している我が国や仏独英の研究に対するのおなじ態度で、この本に接する人は失望する筈である。

フロムのマルクス像は、マルクスを「予言者のメシア思想・キリスト教分離教会派思想・十三世紀トマス・ルネサンス・ユートピア思想・十八世紀啓蒙思想の継承者」(p. 68)と考へ、「世俗の言葉を用いて、予言者のメシア思想の伝統に新しいラディカルな一歩を進め」(p. 6)たものと見、彼の思想は「精神的実現の場としての社会という予言者のキリス

ト教理念」と「個人の自由という理念」との「総合」にはかならないとする所になり立つ。この「総合」のなかに、「総体としてのマルクス」(p. 72)があり、彼のヒューマニズム哲学の核心である「疎外」に基づく「人間概念」の成立根拠もある。「若きマルクス」と「老マルクス」の連続点は「疎外概念」に求められねばならず (p. 51)、アメリカ的誤解からもソ連的動脈硬化からも自由な、真に疎外から回復した「人間主義的社会主義」を求めめるには、若きマルクスの「私有財産機能の分析に発し疎外機能の把握に至る認識を生かすべきである。」「他者からの疎外」のみでなく「人間性の本質からの疎外」をも強調している面こそ、水爆と巨大政治機構を前にした「全人類の疎外」という現状に強く生きる (p. 68)ものであるとする。(フロムのこの面の思索は、近著 *May Man Prevail? An Inquiry into The Facts and Fictions of Foreign Policy*, (Anchor Books), 1961, 95c. に展開されている。ほかに、フロムの内在的研究として推したものに John H. Scharr: *Escape from Authority*, Basic Books, 1961, \$ 6.50. があ